



Title	天明期の蝦夷地図と幕府の北海道農耕適地面積の見積
Author(s)	大崎, 恵治; OOSAKI, Keiji
Citation	北海道大学農経論叢, 43, 167-186
Issue Date	1987-02
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/11016
Type	departmental bulletin paper
File Information	43_p167-186.pdf



天明期の蝦夷地図と幕府の 北海道農耕適地面積の見積

大 崎 恵 治

目 次

1. 天明期の三蝦夷図	167
1) 時代背景	167
2) 蝦夷地図史と天明期	168
2. 松前志について	169
1) 緯度	169
2) 距離	171
3) 正保国絵図	172
4) 「蝦夷志」の方位	173
5) 「松前志」所収図	174
3. 三国通覧図説と附図(蝦夷国全図)	176
1) 概要	176
2) 北海道東海岸の距離	178
4. 蝦夷拾遺と蝦夷輿地全図	179
1) 島形	179
2) 北海道の胴体部	183
3) 農耕適地面積の見積	185
5. 結 語	186

1. 天明期の三蝦夷絵図

1) 時代背景

18世紀後半(宝暦・明和・安永・天明・寛政)に入ると、ロシアの千島列島南下と松前藩政の紊乱^①(場所請負制度の破綻)とが重なって、「蝦夷地

① 飛弾屋事件 松前藩の借財と場所請負のもつれから、松前藩場所請負人飛弾屋久兵衛は、安永9年(1780年)幕府に提訴し、天明元年判決で松前藩敗訴となる。松前藩勘定下役嘉右衛門(元飛弾屋手代)死罪、松前藩勘定奉行湊源左衛門と家老一名が重追放となった。源左衛門によって、松前藩政の内実が暴露されるに至った。

問題」が発生した。

そのために、それまで幕政外におかれていた蝦夷地に、幕政の直接介入を招くことになり、天明五六年の幕府の蝦夷地調査が実施された。その結果、「蝦夷輿地全図」が出現して松前藩旧来図を一新し、天明期（1781～1788）は蝦夷地図史上の画期となるのである。

また松前藩でも、幕府調査に先立つ天明元年に、松前広長によって「松前志」が著され、長年畜積された地理的知識が披瀝され、加えて「広長愚考新図」が載せられている。

更に、幕府調査の発足した天明5年（1785年）には、仙台藩士・林子平が三国通覧図説を著し、附図の一つとして「蝦夷国全図」を刊行した。

以上あげた地図を、ここでは「天明期の三蝦夷図」と仮称するが、共通して云えるのは、いづれも松前藩の旧套を脱せんとする先進性である。然し反面、幕府・松前藩・地理学者という立場が象徴された地図でもある。本稿では三蝦夷図の個別性に注目し、それに検討を加えて、蝦夷地図史の理解を深めたいと考えている。

2) 蝦夷地図史と天明期

そこで、蝦夷地図史に関するここでの知識であるが、その大部分は高倉新一郎・柴田定吉共著^②「北日本地図作製史」に学んでいる。然しここでの問題意識には、いくつかの仮定と限定を含んでいる。先づ蝦夷図を時期的比較を容易にするために、北海道の輪廓に限って観めていることで、次には正保元年（1644年）から始る「松前藩国絵図による系統図」の変遷径路を蝦夷地図発達史上の変則径路と見做していることである。

そう考えると、天明期蝦夷図とは、松前藩旧来図を脱するという意味での「新地図」に他ならなく、「天明期蝦夷図」即「近代的蝦夷図」という考え方に距離をおくことにもなる。別言すれば、天明期蝦夷図は近代的地図作成技術とどう関るかという問題になる。勿論、近代的蝦夷図とは定義次第であって、ここでは、^③「経線・緯線を備えた実測図」という位に考えて、その始

② 第一報 樺太、北海道帝国大学「北方文化研究報告」第二輯（昭和14年）
第二報 千島、北海道帝国大学「北方文化研究報告」第三輯（昭和15年）
第三報 北海道（一）、北海道帝国大学「北方文化研究報告」第六輯（昭和17年）
第四報 北海道（二）、北海道大学「北方文化研究報告」第七輯（昭和27年）

③ 織田武雄「地図の歴史－日本篇」。

点を伊能忠敬が北海道大平洋岸を実測した寛政12年（1800年）に求め、従って成立点を、北海道の残余の部分を④間宮林蔵が1810年代に継続実測して完成の運びとなった「大日本沿海実測全図の北海道部分」の成立時、文政4年（1821年）としている。

以上のように考えるとすると、天明期蝦夷図から二十年或は四十年が近代の蝦夷図成立への「模索段階」ということになる。

従ってここでは、模作段階の始点に位置している天明期地図をとりあげ、地図作成上の技術的背景を問題にしてみたわけである。

以下、縮尺・方位・距離・緯度の視点から比較・検討を進める。

④ 赤羽米一「間宮林蔵」。

2. 松 前 志

既に触れたが、①松前志は、天明元年の著作とされているから②正保国絵図以来100年以上の「松前藩の地理歴史的知識」を集大成した地誌である。以下は断片的に関係項目を検討している。

1) 緯度

当時の最も先端的な地理的知識は緯度の知識であった。「三国通覧図説」はその点で特に有名である。然し、子平が北海道を③「凡四十三度ヨリ五十一二度ニ係テ」と位置づけたのは大きな誤りで、その点、松前志はより正確な④「松前、四十二度有半……宗谷、四十六度余」を記している。これは蝦夷拾遺の⑤「四十一度五分余と四十五度余」には若干劣ものの、松前志が既に北海道の南北関係を稍正しく把握していた証左とも云えよう。

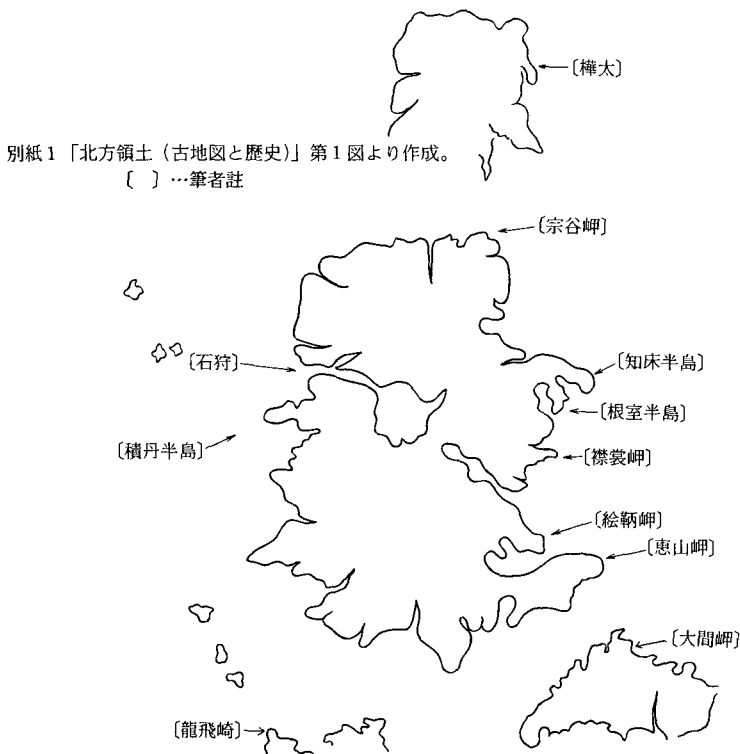
ところが、松前志においての北海道東端の把握は驚くべき曖昧さを示すのは何故であろうか。

先づ緯度であるが、安永7年（1778年）に平沢元愷の示す数値を次のようにあげている。

アツケシ	「四十三度の線を越ゆる」	⑥[43°03']
クナシリ	「四十四度也」	⑥[43°39'~44°31']
エトロフ	「四十五度に近し」	⑥[44°22'~45°33']
ウルツブ	「四十五度を越えたり」	

[] の数値を見れば、当らずとも遠からずであるが、^⑦広長は、アツケシ「誤なるべし」、クナシリ「是又如何あらんや」、エトロフ・ウルツプ「違るにや」と一蹴している。

- ① 「北門叢書」第二冊.
- ② 別表 1.
- ③ ダンピルの「蝦夷島40°~44°, 蝦夷地方44°~51.2°」に比べられる。「北日本地図作製史」北海道(-), 44p.
- ④ 「北門叢書」第二冊. 135p.
- ⑤ 「北門叢書」第一冊. 252p.
- ⑥ [] ……筆者註。地勢堂「根室市地図」を使用。
- ⑦ 松前広長 (1737~1801), 松前藩第9代藩主邦広の9男。



別紙1「北方領土(古地図と歴史)」第1図より作成。

[] ……筆者註

図第1図 徳川幕府撰 正保日本図(部分) 正保元(1644)年ごろ
手写 和紙 折畳1鋪 227.5×253.7cm 秋岡武次郎氏蔵

次に北海道東端の距離把握に目を向けよう。

2) 距離

周廻距離とは、大雑把な海岸線距離と解するが、松前志では

「……本藩周廻のこと昔より八百里と云えども左には非ず。愚按るに凡六百里に近かるべきか…」と記している。

勿論、海岸線屈曲の把み方の精疎如何で距離は変るが、一応、今日のロードマップと蝦夷拾遺とで、距離を比較してみよう。

⑧ ロードマップ (海岸道路距離)

日本海岸	190里 (松前・稚内間)
太平洋岸	194里 (松前・大楽毛間)
オホーツク海岸	208里 (大楽毛・稚内間)

⑨ 蝦夷拾遺

279里 (松前・ソウヤ間)
242里 (松前・釧路間)
150里 (トウベツ・シレトコ間)

⑧ 1980年オートボックスカレンダー地図による。

ロードマップによる

北海道海岸線道路距離 190 + 194 + 208 = 592里

日本海岸 約190里

松前	厚沢部	北檜山	岩内	神恵内	古平	
75k	76.5	118.5	25	32		327k
神威岬	古平	余市	小樽	札幌	石狩	浜益
	30.5	17	20	37.5	24	50
浜益	留萌	苫前	幌延	稚内		
[昭文社地図] 68.6	40	90	57			255.6k
						計 761.6k

太平洋岸約194里

松前	函館	樺法華	67	森	長万部	虻田	東室蘭
95	50	4	黒山岬	65	45	36.5	362.5k
東室蘭	苫小牧	富川	襟裳	襟裳岬			
60.5	45	121	12				238.5k
襟裳岬	豊似	吉野	大楽毛				
60.5	49	66					175.5k
							計 776.5k

オホーツク海岸 約208里

大楽毛	厚床	根室	納沙布岬				
105.5	32.5	23	斜里			161k	
納沙布岬	根室	厚床	標津	55.5	知内別		
23	32.5	57.5	65.5			234k	
知床大橋	宇登呂	斜里					
24	41					65k	
斜里	網走	湧別	紋別	興部	浜屯別	奈谷岬	
47.5	81.5	35	19	102.5	59.5	28	
							373k

⑨ 蝦夷拾遺により地名間距離を集計した。

計 833k

従って周廻距離はロードマップで計592里、蝦夷拾遺で671里(釧路・シレトコ間を除く)となる。

そこで、ロードマップからの約600里と、蝦夷拾遺の周廻700里〔集計距離とは別〕との中間数をとれば、大凡650里ということになるが、更にこれを明治17年大蔵省刊「北海道志」の「北海道の周廻650里」と対比させると、松前志における周廻600里の把握は、当時卓越していたことがわかる。

また、松前志の地名は、北海道東海岸196(小安村まで和入地44、ヘリチまで夷地152)と北海道西海岸172(ヒラタナイまで和入地18〈元録御帖と比べて脱落がありうる〉、ウナベチまで夷地154)との合計368をあげていながら、地名間距離が示されていないのが注目される。ただ松前・宗谷間については「水行二百里なるべし」とあるが、東端の距離については全く触れていないのは、東端の緯度の場合と同様である。偶然とは考えられない。

3) 正保国絵図

そこで、松前藩古図にふりかえってみると、織田武雄「地図の歴史—日本篇」によれば、蝦夷地を除く「日本全体の輪廓が実際に近い形」をとるようになったのは「正保日本図」からであったとされる。

その正保日本図をみると、北海道は「変形された小島」に画かれている。すなわち経度では、青森県の龍飛崎と大間崎の間に収る凡そ^⑩「直径20里」前後の「くづれた円形の島」ということになる。

更に縮尺で松前藩作成の正保国絵図を検討すると、正保国絵図の縮尺は六寸一里であったから、仮に北海道を100里に200里の矩形(周廻600里)とすると、松前藩作成の国絵図は6丈に12丈の大地図にならなければならない。

ところが、松前藩作成の元録国絵図は^⑪「縦二丈七尺横二丈一尺」であったとされ、また正保国絵図と元録国絵図は殆んど同じ内容であったとされるので、松前藩においては、国絵図作図にあたって、特殊な縮尺が用いられたものと考えざるを得ない。

いづれにせよ、正保日本図に見られる北海道は余りにも矮小化されすぎて

⑩ 龍飛崎に近い弁天島は東経140°くらい、大間崎近くの風間浦は東経141°くらいであるから、理科年表による経度1°の84.135Kによって約20里とした。

⑪ 「北日本地図作製史」北海道(-), 11p.

いて且異様に變形された島形である。

そこで、松前藩作成の正保国絵図（別紙1）の特徴をひろってみると

(a) 石狩・勇払低地で区切られる「北海道の胴体部分」が「頭部」に比べて矮小化されていること

(b) 根室半島と知床半島とが北東偏して位置づけられ、従ってオホーツク海岸線が疎暑化短小化されていること

(c) 方位は殆んど確定できないが、^⑫元録松前島郷帖によってみると、東西の二区分で、西蝦夷地とは松前より「ばっかいへ」〔稚内近く〕まで、東蝦夷地とは松前より「つうへち」〔宗谷岬近く〕までである。つまり、東西の分岐点は宗谷近辺（北部「ばっかいへ」から「つうへち」の間）ということであって、恐らく松前〔南端〕と宗谷〔北端〕を結ぶ〔南北線〕をベースとして東西が区分されたものと理解される。そこで、郷帖による方位を新井白石の「蝦夷志」の方位に関連させてみることにする。

4) 「蝦夷志」の方位

^⑬蝦夷志は、享保五年（1720年）の新井白石（1657～1725）による体系的な本州北方地誌である。ここではそのうちの「北海道の方位」に関する部分だけをくり出すことになるが、北海道の島形を縦長の楕円として考えれば理解しやすく、東海岸は、松前から「乍（タチマ）ち東し乍ち北し」て東港ノッサブ〔納沙布岬〕に至り、更に東北行してソウヤに至るとある。また西海岸は、松前から「乍ち西し乍ち北」して北港ソウヤ〔宗谷地方〕に至るとある。これからすれば、東西海岸共に、北上する航路で北の宗谷に至るのであるが、興味がもたれるのはオホーツク海岸で、納沙布岬から北西方向にみる海岸を「東の北に在る者」と位置づけていることである。これは緯線を軸に方位を考えたとみることも出来る。

また白石の海岸線区分は、5区分に発展されていて、郷帖に比べてより実際の区分としている。

すなわち、「イシカリ」河口と「イブツ」〔勇払〕を結んで中央部とし、東・西・東北・北を加えた5区分である。西部はウスベチからテシオまで、北部

⑫ 吉田東伍「大日本地名辞典」蝦夷千島の項目。

⑬ 「北方未公開古文書集成」一巻。

はソウヤ地方、東北部は「ツウベチ」〔浜屯別〕から「ユウベチ」に至るオホーツク海岸、東部は「ハラキ」からオホーツク海岸の「トコロ」〔常呂〕までである。

大離把に今日の緯度で云えば、北部は北緯45°以上、東北部は44°以北のオホーツク海岸としている。もしそうであれば、留萌から天塩に至る海岸線を西北部としなければならないのであるが、その点を割引けば、当時としての画期的な方位感覚を示すものである。

5) 松前志所収図

ところで、松前志所収の絵図であるが、ここでは「広長愚考之新図」(別紙2)だけをとりあげたい。これをみると、北海道は、石狩河口に勇払を結ぶ線で区切られ、松前から東北に流れる二島に画かれている。また海岸線の変化が大きいというだけで、さして正保国絵図と変るところはない。それどころか、納沙布岬を宗谷とほぼ同一緯線上に北上させ、更にその北方先端に突出した「メナシタテ」が画かれているのは、むしろ松前藩正保国絵図より退歩した絵図である。広長が^⑭「夢によって作図した」北海道図であってみれば何の不思議もないとも云えようが、蝦夷志にみられた海岸線区分がここでは無視されているのが何とも奇異である。

然も、北海道の東端の知識の曖昧さは、宝暦4年(1754年)に、国後島に松前藩の場所〔交易場〕が開設されていたのを考えると、信じ難い。

或は、その理由の一端は次の「松前志」の一文に見られそうな気がする。

^⑮「元録中の地図は正保元年の地図にひとしふして誤謬あるまじけれど、東部アツケシの地を嶋とし、江差の郷を酉戌〔西北西〕の方と図し、高山大山を大地図に誌さず、カラフトを小嶋に画けるの類ひ、遺漏するところなきにしも非ず。然れども其時官庫に納りぬれば不倭が憶見を以て浸りに是非せんや」という。

更にこれに類した断片的な文章をあげると、先づ詳細な地名表のあとには

「右方俗の里程を量れるところ証とするに足らず……」と但書きをしているのが注目され、

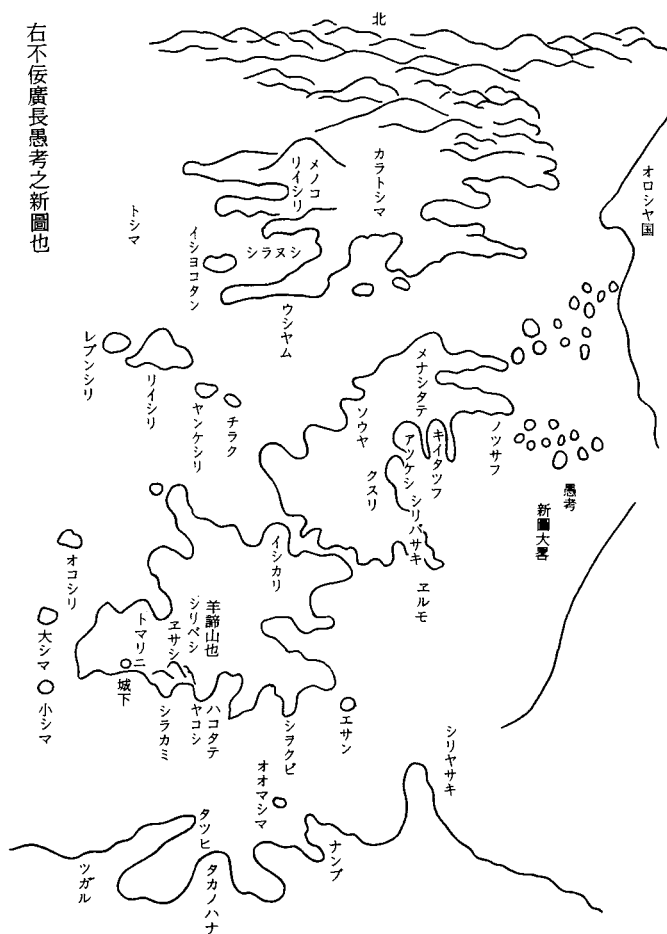
⑭ 「北門叢書」第二冊, 123p.

⑮ 「北門叢書」第二冊, 123p.

また、「海夫の輩此水行五百里とつもれども……海路に里数を云は理外の至ならんか」も記しているのが一層目につく。

加えて、

「吾封域を歴観せる輩妄りに図し……謬語多くして観るに足らず」とあるに至っては独断的と云わざるを得ない。



別紙 2

大友喜作編「北門叢書」より。

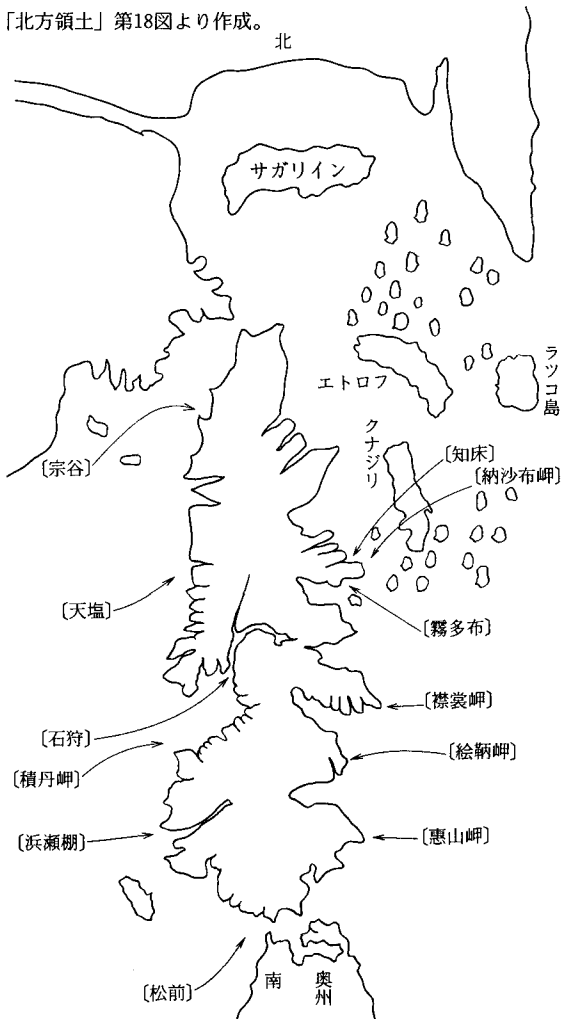
北海道の東端を不明とすれば、北海道図の作図は不可能であって、広長は故意に東端を秘境化し隠蔽したとも考えられるのである。

3. 三国通覧図説と附図（蝦夷国全図）

1) 概要

天明5年の^①蝦夷国全図は、我国最初の刊行蝦夷図として、あまりにも有

① 別紙3。「北方領土」第18図より作成。



三国通覧図説付図「蝦夷国全図」

名であるが、にも拘らず、今日、子兵（1738～1793、仙台藩士）の地図が正しく理解されているとは云えない。

誤解は、先に触れた通り、誤りをおかした「北海道の緯度知識」が強調されすぎ、彼のイラストの蝦夷図の漸新性が無視されているからである。実は彼の蝦夷国全図は松前藩正保国絵図とは似て非なるものである。

そこで、子平の地図の特徴をあげてみると、正保日本図において「矮小化された北海道」を、拡大化し、単純化し、矩形の島形とし、特に重要な点は主要地名間距離を明示したことである。

島形を四角形に作図した点は、天明の幕府調査に参加した最上徳内の三角形作図（蝦夷草紙）に並行していると云えよう。

徳内は、北海道を^②「其形ち親疎二義あり……其親の形象は瓢箪の形に似て倒なるものなり。又疎の形象は、扇の半開きに似て……半開の扇の形の要の所は松前にして……右の角はメナシ〔納沙布岬〕左の角はソウヤに当る……」と記している。

すなわち疎の形とは、松前と納沙布を結んで底辺とし、宗谷を頂点とする三角形である。対して子平の場合は縦長の矩形で、南の横は和人地、北の横は宗谷辺とし、旧来の東蝦夷地と西蝦夷地を縦にとった矩形となる。

以上のように北海道を抽象作図した史料根拠を表明して、子兵は蝦夷志〔新井白石〕・北海随筆〔坂倉源次郎〕・蝦夷随筆をあげ、^③「コノ三書ヲ外ニシテ更ニ一書ナシ」と断定する。自ら「加えた新説」は、^④「ヘイトガ言」により、また「ソノ国〔北海道〕渡海ノ舟人の説」によって「仮コレ相照シテ」著したと記している。

これに憶測を加えると、方位については白石から、緯度については蘭人から、距離については源次郎と船頭から学んだようにうけとれる。

源次郎の^⑤北海随筆には、主要地名間距離（松前とソウヤ・キイタツプ）に加えて「乗り訓れたる舟方」の距離が付記されているからである。

更に海岸線距離の細部を検討してみよう。

② 「北門叢書」第二冊，331p.

③ 「北方未公開文書集成」第三巻，81p.

④ オランダ商館長（1771～1781）。

⑤ 「北門叢書」第二冊，45p. 元文4年（1739年）頃，坂倉源次郎著。

2) 北海道東海岸の距離

先づ海岸線の区分は、白石のそれに沿うたと思われるが、子平の特徴をあげると、松前から宗谷に至る東海岸を、白石が東部と東北部に2分しているのに対して、東部・東北部・北部に3分していることである。東部はハラキからキイタフ〔霧多布〕、東北部はキイタフからウラヤシベツ〔知床半島のオホーツク海岸側つけ根〕、北部はウラヤシベツからソウヤまでとしている。

つまり、白石の東北部を子平は北部に位置づけたのであるから、方位に関して云えば、白石から後退し、むしろ松前藩旧来図に逆行した感がある。然し北海道の東端部である「根室半島と知床半島」とを東北部として区切った点は注目してよい。松前志では東西蝦夷地の分岐点を知床半島のオホーツク海側つけ根とし、蝦夷拾遺でも知床岬としているからである。

ところで、松前から宗谷に至る所謂東海岸の距離であるが、子平は汐首から東端に至る距離と東端からソウヤに至る距離とを稍直線化して作図している点に留意しておきたい。

著書と地図を下記に比較すると、

三国通覧図説		⑥蝦夷国全図
東部	〔ハラキ〕〔汐首近く〕ヨリ 〔キイタフ〕 170里~180里(直径)	汐首・エサン12里, エサン・エリモ75里 エリモ・キイタフ78里 計165里
東北部	〔キイタフ〕ヨリ 〔ウラヤシベツ〕〔斜里の近く〕 80里~90里(直径)	
北部	〔ウラヤシベツ〕ヨリ〔ソウヤ〕 140里~150里(直径)	キイタフ・ノツサブ16里, ノツサブ・ソウヤ東岸120里~130里 計136里~146里
東部・東北部・北部合計390里~420里		東部・東北部・北部合計301里~311里
西部	〔ソウヤ〕ヨリ 〔ウスベチ〕〔熊石近く〕 200里(直径)	クマ石・浜セタナイ15里, 浜セタナイ・ オフイサキ35里, オフイサキ・イシカリ 40里, イシカリ・コブイサキ20里, コブ

⑥ 地図上の距離は、国立文書館所蔵「三国通覧図説」附図
(天明五年秋, 仙台林子平図, 東都須原屋市兵衛梓) によった。

イサキ・テシオ90里	小計200里
テシオ・ヤギシリ7里, ヤギシリ・テウ	
リ10里, テウリ・リイシリ20里, リイシ	
リ・レブンシリ20里, レブンシリ・ソウ	
ヤ50里	
	小計107里

西部（熊石・ソウヤ）合計307里

以上の表からみられることは、三国通覧図説におけるハラキからソウヤに至る東海岸線は「390里から420里」の距離とされていることで、松前志においては周廻600里で且松前・宗谷間は200里であるから、600里から200里を差引くと400里となる。つまり松前志における東海岸距離（松前・宗谷間）は大凡、子兵の「390里から420里」に符合することになり、三国通覧図説と松前志は、かなり正確な距離（東海岸）を示していることにもなる。

ところが蝦夷国全図では、汐首からソウヤに至る東海岸を約300里としているから、著書と附図とでは約100里の差が認められることになる。その点は、北海道を「100里と300里の矩形」に作図しようとした子平の苦心の跡とみられるわけである。

更に子平の苦心を西海岸で見ると、三国通覧図説では、ウスベチ〔熊石近く〕・ソウヤ間を200里としているのに対して、附図では熊石から天塩までを200里とし、天塩から宗谷に至る海岸線を焼尻・天売・利尻・礼文の4島島巡りとして約100里とし、あわせて熊石・宗谷間を約300里としている。以上によって、子兵の地図は無理な抽象化の典型ともみられるのであるが、三国通覧図説の文章と地図は、大胆明快な北海道の説明であり、これによって松前藩の蒙を啓き、北方意識を普及するうえで影響多大であったと考えなければならない。

4. 蝦夷拾遺と蝦夷輿地全図

(1) 北海道の島形

天明5・6年の幕府の蝦夷地調査については、基本史料として^①「蝦夷地一件」があって、幕府調査の推進経過の概要を知ることができる。

然し乍ら、その結果作成されたとされる^②蝦夷輿地全図の作成経過についてはいささかも触れるところがない。というのは調査の主目的が、松前藩領（国境）と松前藩通商ルートの確定に在ったからである。

従ってここでは、調査レポートである「蝦夷拾遺」所収の「東北アジア畧図」に着目し、その部分図としての北海道畧図に検討を加え、蝦夷輿地全図考察への手がかりとしたい。蝦夷拾遺には^③「序文を異にする数種」があるが、先ず天明六年閏十月佐藤玄六郎序のある蝦夷拾遺をみると、その

-
- ① 蝦夷地一件、「新北海道史」第七巻史料一。
 - ② 別紙4。「北方領土」第16図より作成。



分第16図 蝦夷輿地全図 徳川幕府巡検使一行 天明5 (1785) 年 手写 彩色 (津軽・南部・松前=茶褐, 蝦夷・千島=淡黄, カラフト島=淡黄緑, 山丹=緑, 韃而韃之地方=紫, ホウル北岸部分=藍, カムサッケ=無彩 和紙 折畳1鋪 94.0×127.0cm 市立函館図書館蔵

冒頭に、北海道の島形が「請蛤〔トンボ〕に化せんとする水蠶〔ヤゴ〕」になぞらえられている。頭部は白紙崎〔白神崎〕、背は北部のソウヤ、尾は丑寅〔北東〕に流れるシレットコに位置づけられている。

既に触れた最上徳内の島形把握は、「横倒しの飄箆」(親の形象)であるから、玄六郎と徳内に共通する特徴は、第一に、松前から納沙布に至る「北海道の東西軸」をベースに作図していること、第二には頭部に対して胴体部が著しく大きく画かれていることである。

これによって、「北海道畧図」の作図の鍵は、「北海道の東端の位置決定」と「北海道胴体部の把握」にあったであろうことが想像される。そこで④「天明5年の調査経過」に触れておくと、北海道東海岸の調査は、普請役山口鉄五郎の一行と普請役青嶋俊蔵の一行とによって担当され、アッケシ・キイタツプ・クナシリに至り。他方北海道西海岸は、普請役庵原弥六の一行によってソウヤからカラフトに至った。また普請役佐藤玄六郎は、庵原とは別に6月中〔陽暦5月下旬〕御用船でソウヤに至って、調査のあと8月23日〔陽暦7月19日〕ソウヤを発して奥蝦夷地〔オホーツク海岸〕を「海辺通不残」調査をして、10月8日〔陽暦9月6日〕アッケシ着、間もなくアッケシを発して松前に至り、そこで山口鉄五郎と青嶋俊蔵と会談の上、12月〔陽暦天明6年1月〕江戸に帰って調査報告をしている。

以上が天明5年調査の概要であるが、北海道を一周したのは佐藤玄六郎であるから、北海道畧図(実際に近い)の最初の作図者は佐藤玄六郎であろうこと、また北海道太平洋岸の作図に関しては、青嶋俊蔵と最上徳内とがクローズ・アップされることになる。

何故なら、青嶋俊蔵の竿取として調査に参加した徳内は⑤「……奴徳内と云者意気あり、少しく天文学の事にわたりたれば…」と俊蔵に指摘されている通り、調査隊員中唯一人の緯度測定技術者とも考えられるからである。

また、後年の「蝦夷草紙」の著者としての徳内の知識は抜群であって、その点からも一層徳内が目されるわけである。

③ 「北門叢書」第一冊、180p.

④ 蝦夷地一件、332p.

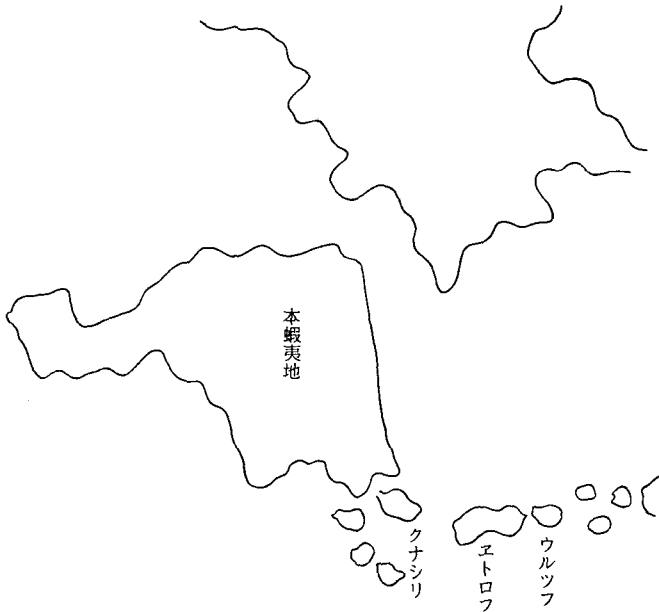
この報告では、キイタツプ迄200里、ソウヤ迄300里としている、325p.

⑤ 「北門叢書」第一冊、181p.

然し乍らここでは、蝦夷輿地全図の^⑥実質的作図者としての徳内は、次のように否定される。

その理由の第一は緯度測定値で、蝦夷拾遺にみられる「松前四十一度五分余、ソウヤ四十五度余」は、今日見る白神崎 $41^{\circ}24'$ 、宗谷岬 $45^{\circ}30'$ に比べて、かなりの精度を示すとは云え、宗谷の測定値が徳内によるものではないことが明白だからである。それでは宗谷の緯度は誰の測定になるか、という問題になるが、第二の理由として蝦夷拾遺には、所収の「東北アジア畧図」(別紙5)に関して次の一文がある。

^⑦「左に図する所 至本蝦夷地、クナジリ島、エトロフ島及ウルッフ島、カラフト島の半、粗量天度……」。これによると、緯度測定者が徳内に限ら



別紙5

東京大学蔵
蝦夷拾遺 (佐藤玄太郎, 天明元年序) より。

- ⑥ 照井壮助「天明蝦夷探検始末記」
作図者として大石逸平と最上徳内をあげている。
- ⑦ 「北門叢書」第一冊, 272p.

れないことが一層はつきりしている。

もし、蝦夷輿地全図の作図者が徳内ではないとすると、次に登上させなければならぬのは、徳内の知識を活用しえた青嶋俊蔵でなければならないが、関連して館図書館所蔵「蝦夷絵図」の一文を引用すると

⑧「天明乙己〔天明5年〕青山俊蔵、蝦夷ヲ発シテ此マデ巡見スル処ノ蝦夷拾遺ノ書記〔佐藤玄六郎〕ニヨリテ惑ヲ破シ新図ヲ参考ス」とある。

これをそのままうけとると、この地図は佐藤玄六郎の調査を根拠として青嶋俊蔵が作図したということになるが、この地図と蝦夷輿地全図との間には若干距離があるように思われる。

その理由の第一は、蝦夷輿地全図をみると、岩内・厚岸・納沙布岬が北緯43°のほぼ同一緯線上に位置づけられているのに対して、別紙6の蝦夷拾遺青嶋俊蔵改定本（天明8年6月序）は、似た島形を示しているにも拘らず、襟裳岬の突出がより小さく、北海道の頭部の位置が西偏して作図されているからである。つまり俊蔵の場合は太平洋岸を平坦に画いていて、この特徴は蝦夷輿地全図にも稍共通すると云えなくはないが、緯度把握においては大きな隔りがあるようにみられること。

第二の理由として最上徳内の作図技術で、寛政2年（1791年）の⑨「蝦夷風俗人情の沙汰」付図を蝦夷輿地全図に比較すると、ソウヤの位置決定において蝦夷輿地全図の徳内作図説も否定さざるをえない。

従って、ここでの仮定は、天明5年に「北海道畧図」の作成があり、その後時期において第三者によって「蝦夷輿地全図」が作成されただろうということである。そうして、北海道畧図は別紙5にみられるように、北海道の胴体部を「ほぼ矩形に作図」した佐藤玄六郎の方が、別紙6にみられるほぼ三角形に作図した青嶋俊蔵或は最上徳内に対して、よりの確であったと考えるのである。

(2) 北海道の胴体部

新井白石は蝦夷志で「……山島に依りて国を為し、地は山陰多く……夷地の幅員広狭は詳かにするを得べからず」と述べる。

⑧ 「北日本地図作製史」、北海道(二)、104p.

⑨ 「北方領土」第17図。

これを正徳5年(1715年)の松前藩上申書

⑩「蝦夷地広狭之義、いか程と申儀極めて申しがたく候」と関連させ、

林子平が「百里ニ三百里ノ一石山ナリ。然ルユヘニ地面悉ク嶮岨ニシテ、中土ニ樹芸ヲナスベキ耕地ナシ」と記しているのは、その前年(天明4年)、幕府の問合せに対する松前藩の回答

⑪「志摩守所領〔松前藩領〕の儀は一体田畑年貢等無之……蝦夷地附の小島多有之 場所に至り候ては異民之近寄候事と相聞候得共 難見届……」と



別紙 6

東京大学蔵

蝦夷拾遺(青嶋俊蔵改訂, 天明八年六月序)より。

⑩ 吉田東伍「大日本地名辞典」第八卷, 10p.

⑪ 蝦夷地一件, 308p.

対比できよう。

宗谷にしても、また北海道東端にしても、松前藩の秘密のベールにつつまれたまま天明5年の幕府の蝦夷地調査に至ったのである。佐藤玄六郎は、天明6年2月6日〔陽暦1月8日〕の報告の一部で

⑫「……^{シヤム}平人地〔和人地〕の分は嶮岨成山々きほひ 打開き候地面無之…
…蝦夷地に至 段々地面広く 大山は凡国の中央に打続有之候処 右山本より海辺迄 野地野原等平地の分広大成儀にて 或は二三十里又は右中央の高山海辺より難相見程広き所も有之 都て草木相茂り 地味も宜敷相見へ申候……」と述べる。

これは北海道胴体部の的確な把え方であって、天明5年の調査においては俊蔵も徳内も経験しえなかった世界である。

(3) 北海道農耕適地面積の見積

蝦夷地一件には、天明6年2月6日の「佐藤玄六郎の調査報告」につづいて、勘定奉行松本伊豆守の北海道農業開発計画伺（天明6年2月14日）がみられる。要点をくくり出すと、

「蝦夷地の儀、去年見分任候趣、別紙写の通、御普請役佐藤玄六郎申聞候間、得と考合候処……

蝦夷人共え農具をあたへ、種子物を渡し、作り方教候は、当時の蝦夷人別にて、早速新開余程出来可任旨にて……」

とある。佐藤玄六郎調査によって、北海道の農業開発計画がたてられたわけで、「凡見積反別の儀左の通申聞候」とつづく。

見積面積の要点だけをあげると、

北海道の周廻を凡700里程とし、そのうち長さ150里、横50里の矩形を考え、面積を1166万4000町歩とした。その1/10の116万6400町歩が農業適地の見積りで、生産高を内地の1反1石の半分として583万2000石と試算している。

ちなみに、たまたま手もとにある昭和4年の「北海道概況」の一文をあげると、「地勢概シテ平濶、地味豊沃ニシテ約二百五十五万町歩ノ農耕適地ヲ有シ……」とある。幕府の見積りが特に過大だったわけではない。更に松本伊豆守は、天明5年12月晦日（陽暦12月1日）付文書で、調査未了におわっ

⑫ 蝦夷地一件，333p.

た、カラフト・エトロフ・ウルフ等の再調査のために、天明6年調査の継続許可をうけ、調査班の編成替の後、天明6年匆々に調査に入ったのであるが、調査責任者である田沼主殿頭が政変によって突然老中を辞任（天明6年8月27日）したため、調査が中止されるに至った。従って調査担当者も間もなく（10月28日、陽暦10月7日）解任されて歴史の舞台から消えることになった。ここでは、佐藤玄六郎の農地面積積算の基礎となった「150里と50里の矩形」に注目しておきたい。

これも憶測であるが、北海道の北端である宗谷と東端である納沙布岬と、襟裳岬とで構成される矩形である。別紙5にみられる玄六郎の北海道畧図と無関係とは思われない。蝦夷拾遺には、オホーツク海岸を「トウベツ〔浜屯別〕よりシレトコ迄海岸里数百五十里」とあり、「石狩から天塩まで」と「アブラコマからクスリ」とが夫々五・六十里に計算できるからである。

結 語

以上天明期の三地図についてたどたどしくみてきたことは、実証というよりは試論にすぎないが、中心課題を一言で云えば、近代的作図技術をそれ程もたなかったであろう佐藤玄六郎によって「松前藩旧来図」の惑〔迷〕が外された点を強調することに在った。

また佐藤玄六郎は、今日の北海道の原像ともいべき畧図を画いたにしても、蝦夷輿地全図の直接作図者ではなかっただろうとも考えている。この点は、青山俊蔵と最上徳内についても云えることで、従ってここでは、蝦夷輿地全図は恐らく第三者によって作図されたものと推測する。又別言すれば、佐藤玄六郎が惑を破ったのは古典的技術によったのであり、その成功の理由はむしろ次の蝦夷拾遺序文を背景にして理解されるよう思われる。

①「……ソレ君子ハ義ニ於テ論シ、小人ハ利ニ於テ論ス。利ヲ論ス小人ニ蝦夷ノ地理ヲ知ラシムレバ、国ノ憂イトナルデアロウ。

……マタ義ヲ論ス君子ニコノ地理ヲ知ラシムレバ、蝦夷ヲ治メ、北辺ノ守リヲ固メテ、赤蝦夷ノ渡リ口ヲ監視スルデアロウ……」とある。

林子平と同じく佐藤玄六郎も一種の慨世の士であったに違いなく、彼が序文を書いたのは、丁度今年より201年前であった。

① 現本現代訳「赤蝦夷風説考」99p.